

【ねがいましては】

平成28年11月22日
第314号

KYOWA SCHOOL

「意欲」

先日、OECDよりPISA（学習到達度調査）の結果が発表されました。高校一年生が対象で、科学・数学ともに上位に位置づけられたそうです。トップはシンガポール、日本は一時、かなり成績を下げていたそうですが、「脱ゆとり教育」の下、それ以降、文科省は頑張ったということでしょうか。

ここ数年、ここへ来る子どもたち（中学生）の様子を見てみると、あることに気がつきます。定期テストが近づいてくると、あれだけ忙しかった私が暇になることがたびたび……。なぜなのかと見て回ると、皆一様に、学校への提出物に躍起になっています。教科書に付属の問題集があり、その問題集にぴったりの書き込みノートがあり、それを指定された日時までに、指定されたページまで仕上げ提出するとのこと……。

つまり宿題ということ。子どもたちの中に広がっている宿題の定義……。終わればいい。

結局、わかっても分からなくても埋まっていればよいわけで、学びの中に必要な「なぜ……」を解決したときの心地よさを味わうことなく書き込んでいます。よい方へ解釈すれば、やらないより少しでもやった方がよい、ならばやらせよう……。というのが文科省の本音かもしれません。

ここへ通う子たちの中には、学校での進度に関係なく自由に先を学んでいる子がいますが、その子たちの普段の表情からすると、本当につまらなそうな表情です。しかしテストが終わると、また先の勉強を意欲的に進めています。

「やる気」にだけの的を当てれば、宿題はやる気なし、それ以外の自由な取り組みにはやる気十分。その行き届いた問題ノート提出義務は、どうやら中学生に留まらず、高校生たちの中にも浸透しているようです。

進学校へ通っている「M」さんの高校では、一切提出はなし、自主的な取り組みを尊重しているようです。一方、中堅の進学校へ通っている、「S」さんの学校では、しっかりノートチェックがあるようで、書き込みに勤しんでいます。

高校でもここまで管理されているのか……。少しばかり驚いたのが率直なところです。

ここまで管理されれば、PISAの結果が思わしくなかった過去を底上げできるのも当たり前か……。と、感じました。

同時に、自ら意欲的に取り組むかという「意欲」を調査したところ、日本はかなり下位に落ちてしまうのだそうです。

やはり……。日本という先進国のプライドを堅持させるための大人たちの計画に、素直に従う今の子どもたちがいます。と、考えたくありません。

いずれにしても、いつかは学校を出て行くわけで、その学校で意欲を失った状態のまま社会やその先の学舎へ旅立ったとしても、こころの土台がしっかりとしていなければ、「何を学んできたのですか」とがっかりされてしまいます。

学校なら「学ぼう」、社会なら「がんばろう」、生きてやるぞという気概を先頭に、力強く生きるのが学校で学んできた若者たちの姿だと思います。何か元気がないのですね。

宿題が出されれば、終わればそれでおしまい。あとは何もしない。高校が決まれば、それでおしまい。もう机に向かわない。大学が決まれば、それでおしまい。アルバイトに専念。

学校という囲いの中で、彼ら彼女らは学ぼうとする力を育てて卒業する。まちがえても、だめでも、何回でもチャレンジし続ける力を育てる。それが本来の学校の姿だと思うのですが。

テストが近いから勉強しなきゃ。受験があるから勉強しなきゃ。お母さんに叱られるから勉強しなきゃ。スマホを取り上げられるから勉強しなきゃ。

数学って楽しいよね、だって、答えに行き着くまでにいろいろな考え方があるんだもの。「この前のテストの時、最後の文章問題、考え方が3つ出てきたので、それを全部書いてたら時間になっちゃった。他の問題解けなかった。それをお母さんに話したら、『あなたらしいわね。おかあさんそんなあなたが好きですよ。』って言われちゃった。」

本当の学びに気がつき、夢中になっている姿を、お母さんは頼もしく思っていたのですね。

私はここに通うほとんどの子どもたちに、そんな気持ちになっていただきたいと願っています。

ある1年生の子が、8+5のような繰り上がりの計算を、指を使いながら時間をかけ解いていきます。さすがにこのままでは、2学年以降筆算が始まるとかわいそうに思い、さくらんぼ計算を丁寧に学習していきます。「今度は、この四角の中に答えがはみ出ないように書けたら、くじが引けますよ。（ここでは、一人一人の力にあわせて、くじを引いてもらいます。）」「よーし、がんばるぞ!」と言って、夢中になって解いています。（くじを引きたいのです。）内容は確かにすでに終わってしまった単元かもしれませんが、しかし、その子が夢中になっているその姿が『学び』そのものです。その夢中になっている「こころ」を育てるのが私の仕事だと思っています。

今も目の前で、黙々と取り組む高校生たちがいます。自分のスピードで、学びの楽しさを味わい堪能し、その気持ちのまま次のステップへと旅だってください。ありがとう。